The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

説一切有部における煩悩説

金　敬姫

はじめに　阿含・ニカーヤにおいて煩悩（kilesa）は染汚なる心理状態を表すものであり，漏（āsava）・結（saṃyojana）・縛（bandhana）・随眠（anusaya）・随煩悩（upakilesa）・纏（pariyuṭṭhāna）などが煩悩の異名として用いられる．一方，三結（ti-saṃyojana）と五下分結（pañca-orambhāgiya-saṃyojana）は沙門果の獲得と関連する．説一切有部（有部）における煩悩説の特徴は，阿含・ニカーヤの「漏・結・縛・随眠・随煩悩・纏」などを〈煩悩〉という総称概念として捉えることと，阿含・ニカーヤから導入した「七随眠」の中，見随眠を「五見」として捉えることにあると思われる．この二つの観点により，有部の煩悩説の展開について考察する．

1.「一切の結・縛・随眠・随煩悩・纏」の展開　有部における〈煩悩〉の概念　『阿毘達磨倶舎論（*Abhidharmakośabhāṣya*）』（『倶舎論』）において煩悩を扱っている箇所は第二章「根品」と第五章「随眠品」とである．「根品」ではダルマの生起という観点から心所法の中の染汚法に，また「随眠品」では煩悩を断ずる観点から九十八随眠に分類される．このような煩悩説の展開は『倶舎論』に至るまで，有部アビダルマ論書において見出される．まず，心所法の分類過程における一つの特徴は，染汚法の異名を示す「一切の結・縛・随眠・随煩悩・纏」という句が心所法の中の染汚法に用いられていることにある．この煩悩の異名のグループが染汚法の総称を示す用例は『集異門足論』まで遡る．特に三漏を定義する際に欲漏と有漏に代わるものとして『品類足論』や『婆沙論』においても用いられる[1]．さらに煩悩の異名のグループを〈煩悩〉として規定するのは『婆沙論』の次の一節から確認される．

> 結・縛・随眠・随煩悩・纏の五義を具足するものを円満なる煩悩と名づける．（『婆沙論』T27, 250b26–27）

ここで注目したいのは，「結・縛・随眠・随煩悩・纏」の五つを具足するものが〈煩悩〉であるという点である．つまり，有部は阿含・ニカーヤに散説される煩悩法の異名を一つのグループとして表現し，染汚法の総称として〈煩悩〉とい

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

う術語を用いている．さらにこの五つの染汚法の異名は心所法の分類においても用いられる．最初の例は，『法蘊足論』「蘊品」において〈心相応行蘊〉を説明する際に，「処品」の法処においての染汚法の説明が省略された形で引用される．さらにこれが，『品類足論』「心相応行蘊」と『阿毘曇甘露味論』「心相応行」『入阿毘達磨論』「心相応行蘊」の説明において確認される[2]．煩悩の異名のグループが染汚法の心所として分類されるのは『品類足論』「弁五事品」第一である．ここで，色・心・心所・心不相応・無為である「五位」の法体系における心所の解釈が次のように記述される[3]．

> 結には九種あり，愛結・恚結・慢結・無明結・見結・取結・疑結・嫉結・慳結である．
> 三縛あり，貪縛・瞋縛・痴縛である．
> 随眠には七種あり，欲貪随眠・瞋随眠・有貪随眠・慢随眠・無明随眠・見随眠・疑随眠である．
> 随煩悩とは何か．諸々の随眠をまた随煩悩と名づく．随煩悩にして随眠と名づけないものあり，すなわち，随眠を除く諸々の余の染汚の行蘊の心所である．
> 纏には八種あり，惛沈・掉挙・睡眠・悪作・嫉・慳・無慚・無愧である．（『品類足論』T26, 693a27–c21）

以上のように，有部では，五つの染汚法のグループによって染汚なる心所法が示される．これが『婆沙論』において〈煩悩〉という概念で捉えられることになる．従って，『婆沙論』において〈煩悩〉であると規定される煩悩法の異名のグループと染汚なる心所法との関連が窺える．さらに心所法を本格的に分類している『界身足論』「本事品」第一では十大煩悩地法・十小煩悩地法・五煩悩（T26, 614b10–11）というように，有部論書で〈煩悩〉という術語によって〈煩悩〉心所の分類が初めて立てられる．

2．有部における見所断煩悩（三結）の展開　有部は四聖諦の現観に基づき，煩悩を断じる観点から十随眠を三界・五部に配し，見所断八十八と修所断十の九十八随眠に体系化する．見所断の八十八随眠は阿含・ニカーヤの三結（有身見・戒禁取・疑）を根拠とする．法の現観によって三結を断ずることは，預流に入るという沙門果として定型化される．三結は MN 1. 2 Sabbāsava-sutta, PTS Vol. 1, 9.17–23 において見所断の煩悩とされ，三結を断じることとしての見道（darśana-mārga）が確認される．以下，有部における三結の展開について考察する．

『集異門足論』『法蘊足論』におけるもの　有部第一期論書は『集異門足論』『法蘊足論』である．その中，まず，『集異門足論』には見所断・修所断・非所断という概念のみが見られ，断惑論からの煩悩説は見られない．また，三結は七随眠・

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

五順下分結・九結の中に位置づけられる[4]．その中，「七随眠」に関しては，見随眠を「五見（有身見・辺執見・邪見・見取・戒禁取）」に解釈し三結と関係づけていることが注意される．これら三結を「五見」にまとめたのは有部独特の仕方であると言われる[5]．『法蘊足論』（T26, 460c）になると「四聖諦を観察する現観道が四沙門果を証する道である」と規定され，四聖諦の現観によって随眠を断じる見所断と修所断という考え方が見られる[6]．さらに「沙門果品」第四において所断の随眠と沙門果の獲得との関係が次のように示される．

> 言うところの無為の預流果とは，此〔の預流果〕の中において，三結が永く断じ，及びそれと〔同じ〕種類の結法が永く断ず，即ち是れは，八十八の諸の随眠が永く断じ，及びそれと〔同じ〕種類の結法が永く断ず，是れを無為の預流果と名づける．…
> 言うところの無為の不還果とは，此〔の不還果〕の中において，五順下分結が永く断じ，及びそれと〔同じ〕種類の結法が永く断ず，即ち是れは，九十二の諸の随眠が永く断じ，及びそれと〔同じ〕種類の結法が永く断ず，是れを無為の不還果と名づける．（『法蘊足論』464c24–465a12）

ここには，預流果は三結と八十八随眠を断じた者であり，不還果は五順下分結と九十二随眠を断じた者であるという阿含・ニカーヤと有部の解釈が並列されている．ここで，九十二随眠は見所断八十八随眠と修所断なる欲界繋の四随眠であると推測される．さらに色界・無色界繋の六随眠を想定すると三界・五部に配される九十八随眠という有部特有の煩悩論が成立する．これは後代の有部教義学まで維持される．一方，三結に対する解釈は『婆沙論』において見られる．以下，これについて考察する．

『婆沙論』『倶舎論』におけるもの　『婆沙論』（T27, 239b17–20）では三結を「有身見結は無記の結，戒禁取結と疑結は不善の結」であると述べる．さらに有部は三結を見所断煩悩の根本にしようとしている．まず，十随眠の中，「五見」と疑は三結に帰せられることが明示され，これは『倶舎論』『順正理論』『顕宗論』においても認められる．『婆沙論』では次のように解説される．

> 十随眠とは，すなわち，五見と疑と貪と恚と慢と痴をいう．預流は此の十随眠の中において，已に六を永断する．すなわち，五見と疑をいう．此の中，ただ三結を永断することのみを説いて，六を説かないのは，ただ転ずることのみを説くからである．すなわち，これの六の中，有身見は是れ転，辺執見は是れ随転，戒禁取は是れ転，見取は是れ随転，疑は是れ転，邪見は是れ随転である．すでに転ずることを説いて，また随転をも説いていると知るべきである．それ故，ただ三結を永断することのみを説いているのである[7]．（『婆沙論』T27, 239a5–10）

ここで，「五見」が三結に含まれる見所断煩悩とされる理由は『婆沙論』と同

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

様に，『倶舎論』「随眠品」(AKBh 310.9–15) にも述べられる．それに基づいて考えて見ると，見所断は「五見と疑[8]」の六煩悩であるが，「《主要なものと根本を把握するから三〔結〕が》(43d) 説かれている」と語る．つまり，見所断煩悩は見苦所断（一部のもの）である有身見・辺執見，見苦・見道所断（二部のもの）である戒禁取見，見四諦所断（四部のもの）である，疑・見取・邪見があるが[9]，その中，「有身見から辺執見が，辺執見から戒禁取が，戒禁取から見取が，疑から邪見が生じる[10]」ことから，生起の根本原因となる三結を説くことにより，辺執見・見取・邪見も説くことになる．同じ記述は『順正理論』『顕宗論』，AKVy，TA，LA においても認められる点から[11]，三結を根本なる見所断煩悩として把握していると言える．このように有部の断惑論は「四聖諦の現観」に基づき，見所断煩悩の中，三結が根本なるものであると示している．

有部における「七随眠」導入の理由　さて，断惑論の中心を占める「七随眠」は阿含・ニカーヤに散説される煩悩群の一つである．『集異門足論』で見随眠を「五見」にまとめて以降，『法蘊足論』になると見所断と修所断による見道・修道の修行道が確立される．さらに『品類足論』では「七随眠」に基づいて見所断八十八随眠・修所断十随眠という分類が成立することから，「七随眠」を重視する傾向が見える[12]．有部における「七随眠」導入の理由について考察すると，櫻部［1952: 24］は有部が「七随眠」を重視する理由を「他の諸説に比して，割に偏りなく整って居る」と推測する．しかし，『法蘊足論』に述べられるように，煩悩の分類はそれを断じるための修行道の形成と関連する．ここで注目したいのは，阿含・ニカーヤにおいて諸法の性質に対する正しい理解である法の現観によって断じられる三結は，見随眠を「五見」に解釈することによって，その中に含まれることである．上述のように，三結には見所断煩悩である「五見」と疑が含まれ，それらは四聖諦の現観（見道）によって断じられる．従って，有部は見随眠を「五見」にすることと，所断の煩悩を三界と四聖諦に対する迷いによる九十八随眠に分類することから，修行道を確立すると共に，煩悩説を理論的に再構築したと言える[13]．

まとめ　以上，「一切の結・縛・随眠・随煩悩・纏」と「七随眠」を手がかりにして有部における煩悩説の展開を考察した．『婆沙論』では，煩悩法の異名を一つのグループとして表現し染汚法を総称する場合，〈煩悩〉という概念が用いられる．また、有部が「七随眠」を導入し，断惑論の中心に据えるのは「七随眠」に見随眠と疑随眠が含まれていることによるのである．さらに見随眠を「五見」

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に開くことによって，沙門果の獲得において定型化されている見所断の三結と関連させるからであるということが確認される．

1）『集異門足論』T26, 383a,『品類足論』T26, 717b,『婆沙論』T27, 243c–244a.　2）『法蘊足論』T26, 500c, 501b,『品類足論』T26, 699b,『阿毘曇甘露味論』T28, 970a,『入阿毘達磨論』T28, 981c–982a.　3）『品類足論』のものは『薩婆多宗五事論』T28, 995c 14–19,『阿毘曇五法行経』T28, 998c18–22 において心所法の中に取り上げられているものを分類したものである．　4）『集異門足論』419c, 439a, 446a–b.　5）櫻部［1955: 26］.　6）『法蘊足論』462a–b.　7）『鞞婆沙』T28, 420b においては欠落．8）AKVy 492. 3–4, TA none, LA P Ñu 165a2–3, D chu 131b5.　9）『婆沙論』T27, 239a. 10）AKBh 304.11–305.13,『婆沙論』245c.　11）『順正理論』T29, 643c,『顕宗論』T29, 906b, AKVy 492.15–18, TA P tho 306b1–2, D do 166b5–6, LA P Ñu 165b1–2, D chu 132a3–4. 12）『集異門足論』439a, 399c,『法蘊足論』462a–b,『品類足論』697b（『衆事分阿毘曇論』649b）.　13）Frauwallner［1995: 153–184］は法勝の『阿毘曇心論』「随眠品」を分析して，七隠眠と「五見」の導入は現観論（abhisamayavāda）への出発点であると述べる．

〈略号と参照文献〉

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan (ed.), Patna, 1967. AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra, U. Wogihara (ed.), Tokyo, 1932–1936. TA *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthanāma* (by Sthiramati), P No.5875, D No.4421. LA *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Lakṣaṇānusāriṇīnāma* (by Pūrṇavardhana), P No.5594, D No.4093. Frauwallner. E. "Abhidharma-Studien" *WZKSO*, Band VII, 1963, Band VIII, 1964. Eng. tr. By Sophie Francis Kidd, *Studies in Abhidharma Literature and the Origins of Buddhist Philosophical Systems*, New York, 1995. 櫻部建「九十八随眠説の成立について」『大谷学報』35-3, 1955, pp.20–30.

〈キーワード〉 煩悩，三結，五見，七随眠，見所断，四聖諦

（大谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service